「アフリカが本当に豊かな地域になるためには」

氏名	谷中　達也	学校名	茨城県 桜川市立桃山学園
担当教科等	社会、外国語、道徳、学活	対象学年（人数）	7年1組（38 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2022 年 11 月7日～11 月 25 日（7時間）	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：社会科・地理、特別活動〔学級活動〕

2. 単元(活動)名：世界の諸地域 アフリカ州

3. 授業テーマ（タイトル）と単元目標

授業テーマ：「アフリカが本当に豊かな地域になるためには」

単元目標：

・アフリカ州を大観し、自然環境・文化・産業について理解することができる。（知識・技能）

・大国からの支援や開発によるアフリカ諸国における持続可能な社会の実現についての可能性を考え、表現することができる。（思考力・判断力・表現力）

・アフリカ州の課題を SDGs の 17 のゴールから考え、地域的特色と関連させながら課題の解決に向けて主体的に追究することができる。（主体的に学習に取り組む態度）

関連する学習指導要領上の目標：

・「地理的分野の内容B「世界の様々な地域」の(2)「世界の諸地域」に位置付き、①アジア②ヨーロッパ③アフリカ④北アメリカ⑤南アメリカ⑥オセアニアの各州を取り上げる。その際、各州において空間的相互依存作用や地域などに着目しながら、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を行う。」（中学校社会科学習指導要領内容より）

・「〔学級活動〕の2「内容」（3）一人一人のキャリア形成と自己実現、ウ 主体的な進路の選択と将来設計、目標をもって、生き方や進路に関する適切な情報を収集・整理し、自己の個性や興味・関心と照らして考えること。」（中学校特別活動学習指導要領内容より）

4. 単元の評価規準	①知識及び技能	アフリカ州を大観し、自然環境・文化・産業について理解している。
	②思考力、判断力、表現力等	大国からの支援や開発によるアフリカ諸国における持続可能な社会の実現についての可能性を考え、表現している。
	③学びに向かう力、人間性等	アフリカ州の課題を SDGs の 17 のゴールから考え、地域的特色と関連させながら課題の解決に向けて主体的に追究している。
5. 単元設定の理由・単元の意義（生徒観、教材観、指導観）	【単元設定の理由】 本単元のアフリカ州は、人類発祥の地であり、四大文明のひとつであるエジプト文明を歴史的分野で学習している。古い歴史を持つ地域でありながら、ヨーロッパの植民地支配を受け、独自の文化の継承がなされていない。経済的には、ほぼすべての国において農業や鉱業が産業の中心となった植民地時代から続くモノカルチャー経済を基盤としており、日本をはじめとする先進工業国、新興国等の様々な援助を受けているという脆弱な経済基盤が貧困や民族対立など多くの問題につながっている。このことから、この州の特徴を考えると SDGs の 17 個の目標を解決すべき要素がたくさんあり、持続可能な社会を考えるためにイメージがもちやすいと考えた。 【単元の意義】 「アフリカ州」についての学習では、「アフリカが本当に豊かな地域になるためには」という単元を貫く学習課題を追究することとする。単元を貫く学習課題を追究するために、焦点化された事例として「人と世界を結ぶコーヒーのものがたり」を扱う。このコーヒー豆の農園を営む人々には、食料問題が深刻化している課題がある。だからこそ、本事例を自然環境、人口、産業、歴史の視点で多面的・多角的に考察することで、アフリカ州の諸課題を浮き彫	

りにしていく考察、説明の学習ができると考えている。また生徒が、アフリカ州で起きている問題を身近なものだと感じられるように、青年海外協力隊 OG である本校職員の体験談や JICA の研修員による自国のプレゼンテーションなどの国際交流会を設定する。併せて、生徒にとり身近な問題として、開発途上国を何とかしたいという気持ちを高めたいと考える。

【児童／生徒観】
本学級の生徒は、アジア州やヨーロッパ州の学習を通して、プランテーションや加工貿易、植民地支配など基礎的な知識について学習している。資料をもとに、開発途上国における因果関係を読み取ろうとする姿も見られつつある。アフリカ州については、「砂漠がある」「支援が必要」「貧困」などのイメージをもっている。また、モノカルチャー経済になっていることなど、具体的にどのような課題があり、どのような支援が行われているのかといった認識については不十分である。

【指導観】
本時の指導に当たっては、「村を発展させるためには、どうしたらよいだろうか」という課題に対して、複数の資料を用意し、ロールプレイングの要素も取り入れて課題解決を図っていく。村を発展させるための手段として①交通②水③電気の3つの視点に絞り、そこから本時の課題を捉えさせる。個人の考えを整理した後に、グループをつくり、交通・水・電気の中から1つの視点を定めて、発展させるための事業を考察し、プレゼンテーションをする。また、授業の終盤では、アフリカ州が抱える課題を解決するために SDGs のどの分野に力を入れていくべきかを選び、自分には何ができるかを考えることによって、遠い国で起こっていることでなく自分ごととして捉え、行動に移していく気持ちを育てていく。

6. 単元計画（全8時間）

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	学級活動 「開発途上国の課題を知ろう」	アフリカ州の国々への理解を深める。	1. 3名の JICA 研修員による各国紹介（プレゼンテーション） ケニア共和国／南アフリカ共和国／シエラレオネ共和国 2. 真壁の町紹介（プレゼンテーション） 伝統文化や産業、自然環境を英語で発表する。 3. レクリエーション 研修員と日本の遊びを紹介し一緒に体験する（鬼ごっこ）。 4. 振り返り 印象に残ったことや更に知りたいことを記入し、グループで共有する。 【JICA 研修員による各国紹介】	・パワーポイント ・振り返りシート
2	社会 「アフリカ州の自然環境」	砂漠化が進むサハラ砂漠の学習を通して、アフリカ州の自然環境を大観し、環境的側面からアフリカ州の課題を見出す。	1. 広大な砂漠が広がるアフリカ州の地形を大観する。 2. 降水量の分布から気候区分の特色を考える。 3. サハラ砂漠における砂漠化を問題視する。 4. 地図帳からサハラ砂漠の周辺地域の河	・パワーポイント ・ワークシート

			川や水路などにどのような役割があるのかを推察する。 5. 水資源確保の上での問題点を考える。 【サハラ砂漠緑化計画を考える生徒】	
3	社会 「アフリカの歴史と文化」	アフリカ州の文化の特色や変化について、歴史的背景やヨーロッパ州とのつながりと関連させながら理解する。	1. 人口分布の特色を考える。 2. アフリカの歴史的なあゆみを確認する。 3. 植民地化による様々な問題（公用 語・伝統文化・産業開発）について知る。 4. アフリカ州諸国の独立が必要であったか考える。（水色賛成・桃色反対） 【アフリカ州諸国の独立についてのグループの考え（ロイロノート）】 5. SDGs について紹介する。	・パワーポイント ・ワークシート
4	社会 「特定の輸出品に頼るアフリカの経済」	モノカルチャー経済について知り、その問題点を考える。	1. 世界に輸出されるカカオやコーヒーを例にプランテーション農業について知る。 2. アフリカの主な農産物の分布図を作成する。 3. アフリカの鉱工業の分布図を作成 する。 4. １～３の活動をもとに、農業と鉱工業の問題とフェアトレードの必要性について考え、班と全体で意見交換を行う。 5. モノカルチャー経済のしくみと問題点を個人でまとめる。 【フェアトレード製品の缶コーヒーを実飲する生徒】	・パワーポイント ・ワークシート① 【資料 1】「人と世界を結ぶコーヒーのものがたり」
5	社会 「アフリカが抱える課題とその取り組み」	アフリカ州の経済発展を妨げる課題について、民族問題、人口問題などの視点から理解する。	1. アフリカ州の課題について、都市化、人口増加、環境問題などの視点から理解する。 2. アフリカ州の民族問題について、民族分布と国境線等の資料から考察する。 3. アフリカ州の人口問題について、死亡率、国民総所得等の資料から考察する。 4. 児童労働の実態の資料から、アフリカ州が抱える課題に気付き、先進国との関わ	・パワーポイント ・ワークシート

			りについて考察する。 5. SDGs について復習する。 【アフリカ州の課題を SDGs の 17 のゴールから考え発表する生徒】	
6	学級活動 「青年海外協力隊体験記」	ブルキナファソの課題と今後の展望を SDGs の 17 のゴールから考える。	1. 青年海外協力隊 OG である本校職員塩畑絵梨教諭のプレゼンテーションをもとにブルキナファソへの派遣時の体験談を聞く。 2. ブルキナファソについて、開発途上国における課題や今後の展望を記入する。 【塩畑教諭による特別授業】	・パワーポイント ・振り返りシート
7 本時	学活 「私たちの村を発展させよう」	村の一員として、村の発展を考えることで、開発途上国の立場になって、開発や国際協力について考える。	1. アフリカにある村の話をする。 2. 村を発展させるために、交通、水、電気の中から優先して必要なものは何かを班ごとに考える。 3. 理由を含め、班ごとに発表する。 4. 自分にできることは何か、SDGs の 17 のゴールから考える。 【村を発展させる方法を選ぶ生徒】	パワーポイント 【資料 1～4】

7. 本時の展開（7時間目）

本時のねらい：アフリカ州にある村を発展させるために、村の課題を整理し、開発途上国の立場になって開発や国際協力について意見交流を行い、SDGs の視点と関連付けて自分の意見をまとめることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 （支援）	資料（教材）
導入 （5 分）	1. 本時の学習課題を確認する。 問 私たちの村を発展させるためには、どうしたらよいだろうか。 め 私たちの村を発展させるためには、どうしたらよいだろうか。 村を発展させるために、開発途上国の立場になり、SDGs の視点から支援する方法を考える。	・既習事項を確認し、学習への意欲を喚起する。 ・開発途上国が抱える問題に着目させ、本時のめあてにつなげていく。 ・タブレットを活用して、生徒に資料を配布する。 ・資料から様々な立場の村人の願いや思いを確認できるようにする。	パワーポイント 【資料1】
展開 （30 分）	2. 村を発展させるために、何から整備すればよいか考える。 (1) 資料から村の状況を把握する。 (2) 交通、水、電気の3つの視点から1つ選ぶ。 (3) タブレットを活用して個人の考えを整理する。 3. 各グループで付箋を活用して個人の考えを話し合う。 (1) 村を発展させるために、最優先するべきものを説明する。 (2) 村を発展させるためのプロジェクトを1つ決めてプレゼンする。 4. グループで出た意見を全体で共有し、比較・検討する。 ・交通、水、電気の様々な視点から村を発展させるための工夫を知る。	・資料から読み取れる情報を付箋にまとめるよう指示することで、思考の可視化を図る。 ・開発途上国の立場に立って、開発や国際協力できる事業を企画・提案するように指示をする。 ・ロイロノートで回答を共有し、互いの意見を共有化することで、新たな意見や考えを発見できるようにする。 ・最終的なひとつの答えが存在しないということにも触れ、多面的・多角的な意見を出させる。	・生徒用タブレット ・ロイロノート ・パワーポイント ・ワークシート①～③ 【資料2～4】
まとめ （15 分）	5. 学習のまとめと振り返りをする。 (1) 今までの学習を通して、アフリカ州の人々の生活が豊かになるために最も重視したい項目を SDGs の 17 のゴールから選択する。 (2) SDGs の視点と関連付けて自分にできることをまとめる。 (3) 授業を振り返り、自分の意識や気持ちの変化を学級で交流する。	・自分が考えた実践すべきことを全体で交流することにより、実践意欲を高める。 ・SDGs 達成のために身の回りにできることが多くあることを確かめさせる。	・生徒用タブレット ・ロイロノート

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

グループワークの様子やワークシートの記述から、アフリカ州の課題を SDGs の視点と関連付けて自分の意見をまとめることができているか見取る。

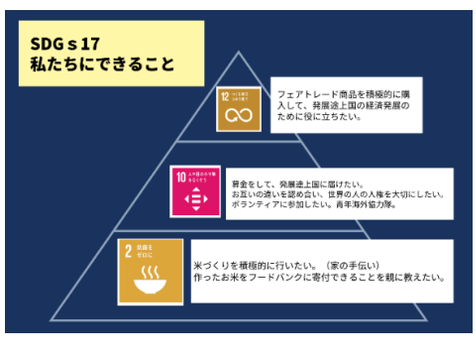
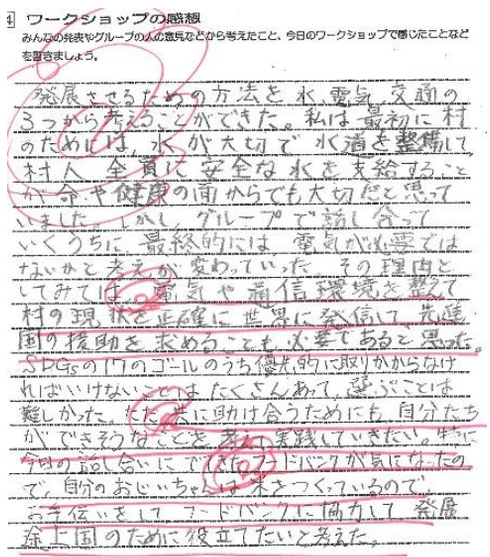
9. 学習方法及び外部との連携

授業実践に際して、村の発展に関する①交通②水③電気の3種類の資料を用意し、生徒に選択させ優先順位を考えさせた。この資料は、青年海外協力隊としてブルキナファソで2年間活動した同僚から村の様子を聞いたことをもとに作成したものである。開発途上国の現状を正確に伝えることで課題解決に対する気持ちを高めていけると考えた。また、本時の学習では、ICT を使用した授業づくりを意識した。授業者側では、授業の流れに沿ったパワーポイントでのスライドを作成し、生徒が興味・関心をもって学習できるようにした。

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組
この授業は、教師国内研修の研究授業であると同時に、桃山学園の授業公開日に合わせて保護者に公開して行った。大勢の保護者に参観していただき、国際理解教育・開発教育のために SDGs をどのように学校教育で扱っているのかを発信することができた。また、学年の職員とも連携し、同じ内容で他のクラスでも授業実践を行い、他の教師の国際理解教育の推進・指導力向上にも力を入れた。

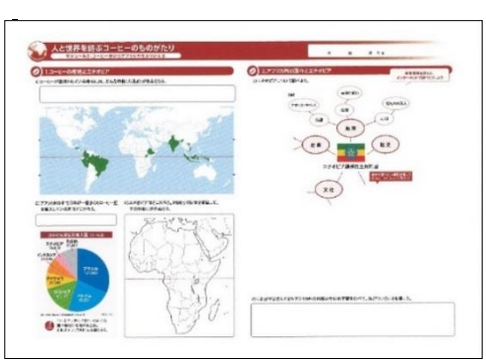
【自己評価】

11. 苦労した点	本単元で扱う「アフリカ州」は教科書の内容では4時間扱いの単元で、各国の特徴も詳しく取り上げられていない。したがって、各国の現状を捉えた上で、開発途上国の課題を読み取ることが難しかった。そこで、JICA 研修員による学校訪問や青年海外協力隊の OG である本校職員の特別授業と絡めて展開することによって、アフリカ州全体の特徴を大観して学べるように設定した。また、SDGs について、7年生はこれまで学習したことがなかったため、社会科の授業の中で扱うだけでは理解が深まらないと考え、掲示物や学級活動でも SDGs について生徒に考えさせられるように工夫した。
12. 改善点	「アフリカ州を本当に豊かな地域になるためには」という単元を貫く学習課題のもと、自然環境・文化・産業の各分野から開発途上国の持続可能な社会づくりを考察していった。しかし、現地の人が本当に求めることはわからず、あくまでも先進国である私達の視点からの考え、または想像で留まってしまった部分があった。その原因としてみては、授業者である私自身が現地での体験がなかったこと等が反省点である。実際に青年海外協力隊 OG の特別授業の中には、現地で体験したからこそわかる様々な視点や思いが強く伝わってきた。そのため、生徒の心に響く部分が授業後の感想文から読み取れた。また、現地の人が考える豊かさは、その地域を取り巻く環境によって大きく変わってくることが JICA 研修員による学校訪問から気づかされた。そこで、単元の最初に開発途上国の実態を体験できる「貿易ゲーム」を取り入れたい。貿易ゲームでは、活動を通して、自由貿易を疑似体験するだけでなく、過程を振り返ることがきる。不公正な貿易が途上国の人権状況を悪化させていることに気付くことができる。開発途上国の課題解決に何が必要かを考えることが有効的であると考えられる。
13. 成果が出た点	アフリカ州の国々を理解するにあたって、JICA 研修員による学校訪問や青年海外協力隊 OG による特別授業は、教科書では学ぶことができない開発途上国の現地の状況を生徒にわかりやすく伝える機会となった。教科書で紹介されている写真資料は、「サハラ砂漠」「キリマンジャロ山」といった地形のものや、モノカルチャー経済を象徴する「綿花の収穫」「カカオの実の収穫」、貧富の差を表す「ナイロビのビル群とスラムの様子」などアフリカのほんの一部の側面にしかすぎない。ブルキナファソの村のフリーマーケットの様子、電気や学習用具が整備されていない学校の様子、舗装されていない道路の様子、水道がないため水を汲みにいく女性の様子などをたくさん紹介したことで、生徒は「どこか遠い国のことが教科書に載っている」というだけではなく、「同じ時代に同じ地球で起きていること」として、開発途上国であるアフリカ州の国々の発展の課題を考えることができた。また、UCC ホールディングス株式会社の持続可能な発展について考える ESD 探究プログラム事業「人と世界を結ぶコーヒーのものがたり」の授業実践に取り組んだこともあり、フェアトレード商品には、地球環境を守りながら、労働搾取や児童労働などの社会的な問題を解決するといった役割があることに気が付くことができた。また、生徒自身がフェアトレード商品を購入することによって、生産者や労働者に適切な賃金が支払われることで、現地の人々が安定した生活を送ることができるといったことを知ることができた。実際にフェアトレード商品の缶コーヒーを渡して、実食したことによって、1本の缶コーヒーから世界を見つめる手がかりにもなった。翌日、生徒との交換日記の中には、「コンビニの棚に並ぶフェアトレード商品を見た」といったような、身近な生活の中にある SDGs の視点を養うことができた。

14. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	【第6回　振り返り】 水道もガスもないのにこんなに楽しく過ごせるんだなと思った。後間違えてもすぐに発表できる子供達がすごいと思った。 後先生はどうやってフランス語をしゃべられるようになったんですか ブルキナファソでは色々な民族の人がいることがわかった 協力隊は120種類以上の職種があり、大人になったら自分にもできることがあるのかなと思って興味を持った。 ブルキナファソでは、十分な生活や教育を受けれていない子が多いということがわかった。僕は、これから、ノートや、鉛筆などの寄付を積極的にしていこうと思った。 ブルキナファソの話を聞いて、文化や言葉の違いがあったとしても通じ合えればとても楽しくてたくさん学ぶことが出来ることがわかりました。 今回紹介していたブルキナファソでは電気・水道が通っていないし家も日本みたいにできているわけでもないのに自分たちにできることを各自やっていて身の回りのものを使って便利に生活しているのがすごいと思った。 【SDGs の観点から自分達にできること】  【第7回　振り返り】  4 ワークショップの感想 みんなの発表やグループの人の意見などから考えたこと、今日のワークショップで感じたことなどを書きましょう。 発展させるための方法を水、電気、交通の3つから考えることができた。私は最初に村のためには、水が大切で水道を整備して村人全員に安全な水を支給することが命や健康の面からでも大切だと思っていました。しかし、グループで話し合っていくうちに最終的には電気が必要ではないかと考えが変わっていった。その理由としてみては電気や通信環境を整えて村の現状を正確に世界に発信して先進国の援助を求めることも必要であると思った。SDGsの17のゴールのうち優先的に取りかからなければいけないことはたくさんあって、選ぶことは難しかった。ただ共に助け合うためにも自分たちができそうなことを考え実践していきたい。特に今回の話し合いでフードバンクが気になったので、自分のおじいちゃんは米をつくっているので、お手伝いをしてフードバンクに協力して発展途上国のために役立てたいと考えた。
15. 授業者による自由記述	今回の教師国内研修を通して、自分自身が世界の問題を自分事としてとらえることができた。最初は児童生徒だけでなく、私を含め教員も SDGs に対する認識が乏しかった。しかし、フィールドワークや授業を通して、日本各地で地域に根付いた人々の交流や企業による SDGs の実践が行われていることを学んだ。そして、SDGs は学校教育の中でも幅広く活用することができる可能性を知ることができた。 授業の中に置き換えると SDGs は社会科の地理の学習以外でも、様々な産業の学習とも関わっていることがわかり、日本を客観的にみることも可能だと気付いた。また、学校生活の中では、児童生徒会活動の各委員会で実践できる。まずは、身近な所から自分達の生活における課題を見つけて、SDGs の 17 のゴールから考えることができる。実際に考えたことを実践してみると、SDGs への理解が更に深まる。私は、文化祭で学習発表の場を設定して、児童生徒会の SDGs への取組発表を行った。SDGs は生徒自身が身近な問題から主体的に解決するためのツールにもなってくる。教師自身も恐れずに挑戦することが大切になってくる。新しい言葉だからと言っても、難しいものでもない。いくらでもSDGsと関連した教育活動は生み出せる。今後は研修で学んだ地域間交流を通して地域をより深く理解する学習に取り組んでいきたい。その中で児童生徒自身が、地域と世界との関わりに気付き、考え、行動することでグローバルな視野をもちながら、地域をよりよくするために行動する主権者（＝持続可能な社会の創り手）となっていくことを期待する。そのためにも、今後も研修で出会った先生方や講師の方々との関わりを大切にしながら学び続けていきたい。

参考資料：

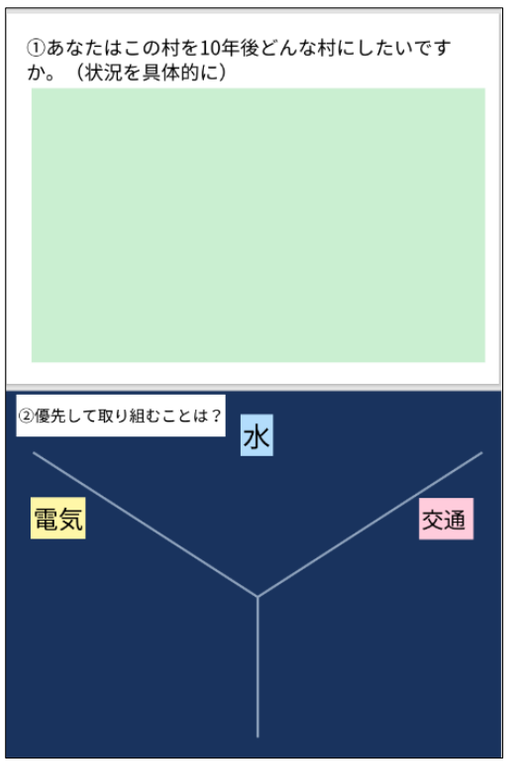
・「ESD 探究プログラム『人と世界を結ぶコーヒーのものがたり』」
UCC ホールディングス株式会社



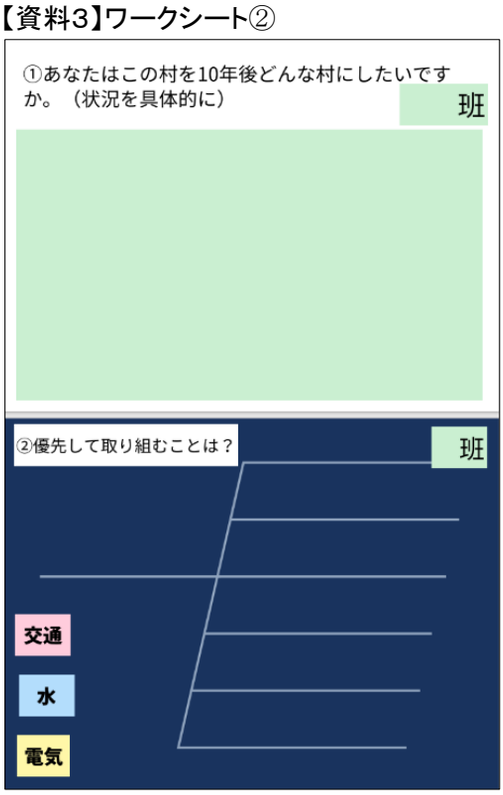
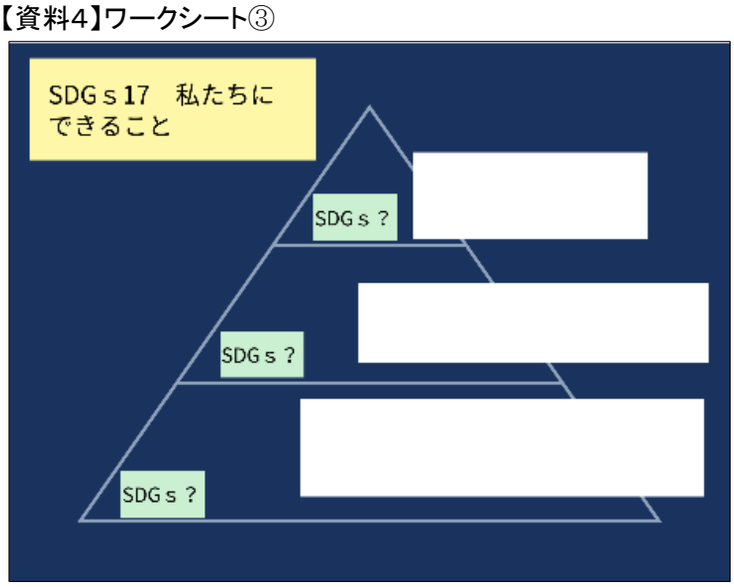
・ワークショップ「わたしたちの村を発展させよう」下辻孝美先生
https://www.jica.go.jp/yokohama/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/ku57pq000009uyq1-att/jissen_07.pdf

添付資料:【資料 1】パワーポイント

【資料2】ワークシート①



【資料3】ワークシート②



【資料4】ワークシート③